# 平成26年度「総合的な学習の時間」実践報告

「総合的な学習の時間」委員会　阪本康之　塗田佳枝　北原立朗　石田光枝
對崎加奈子　高良正輝　都志見聖子　建元善寿

キーワード：総合的な学習の時間、校外学習、課題解決、伝統文化理解、国際理解

## 1. はじめに～本年度「総合的な学習の時間」のねらい

### (1) ツクサカの「総合」

本校では新指導要領の告示を受け、平成23年度の入学生から教育課程の改訂を行い「総合的な学習の時間」については土曜日午前中に2単位科目の授業とした。

平成21年に文部科学省より告示された新指導要領における「総合的な学習の時間」の目標は以下の通りである。

> 横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して，自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに，学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探究活動に主体的，創造的，協同的に取り組む態度を育て，自己の在り方生き方を考えることができるようにする。

本校は上記の目標の到達に向け、総合学科の特性を生かした独自のアプローチを目指している。その具体的方法として3年間を通したキャリア教育の視点から、1年次における開発科目「産業社会と人間」と「キャリアデザイン」の延長上に「総合的な学習の時間」を位置づけてきた。その流れの中でこれまで行ってきた課題解決、主体的活動、共同作業の発展的な内容を行い、さらにはその中で学び、培われた能力の出力先として3年次における自己の進路決定、あるいは「卒業研究」の成果につなげることが最終的に目指すところである。

そうした背景の中、「総合的な学習の時間」を履修する2年次生において、本校の一大行事である校外学習が12月に行われる。毎年ホームステイや学校間交流、自然体験など多岐にわたる活動が行われている校外学習をいかに成功させるかが、2年次生の成長におけるメインテーマと言っても過言ではない。そのためには校外学習の前段階において、生徒の学習へのモチベーションを上げ、主体的あるいは創造的に取り組む姿勢を養うとともに、人間的に広い視野・視点をもって取り組む力を身に付けている状態にすることが、本校ツクサカの「総合的な学習の時間」に課せられた重要な使命であると考えている。

### (2) 20期生のキーワード「出会い」

現2年次である20期生は、3年間を貫く学習テーマの一つとして「出会い」をキーワードに進めてきた。これは「出会いの中に学びがあり、学びの中に出会いがある」という教員の強い思いのもと、多くの体験を通して、広く深い人間性を育みたいという願いを込めた言葉である。

奇しくも現代における情報化社会においては、毎日毎秒我々は膨大な量の情報が身の回りを行き来している。そのためいわゆる「情報としての知識」はインターネットをはじめとする多くのメディアによって極めて容易に手に入る時代となった。にもかかわらず身体的体験や、実社会の中での関わりを通した体験はむしろ非常に希薄になっており、「体験にもとづく知識」の少なさは教育の分野に限らず今日の日本社会において大きな課題といってもよいであろう。

そのような状況下で生徒達の学習状況をよくよく観察してみると、各科目や授業内で学んだ知識と、それを実生活の中で生かし、あるいは選択し行動するという発想が乖離している様子が見て取れる。特

にレポートやプレゼンテーションを行う際には機械的にインターネットで検索した結果をそのままコピーして提出し、受け売りの言葉で発表する傾向が年々増加しているように思える。こうした状況では学習における達成感を得られるはずもなく、学問を志す者にとっての醍醐味である「発見」や「感動」といった体験を得ることはできない。さらには「確かな学力」の成熟はおろか、学問に対する興味や知的好奇心そのものの欠如に繋がることを非常に危惧している。

上記の分析から、今年度の「総合的な学習の時間」に求められる活動を、生徒の自主的活動を主眼目にしつつ「本物と出会う」という体験的学習をメインテーマに以下の2つの活動を試みた。

1学期：「青春18切符で日本と出会う
～各地の風土・文化・産業を体感する」
2学期：「世界と出会う ～世界と日本、そして自分」

内容は後述するが、どちらも「原体験」を大切にし、生徒自身が身体を通して学んだことを、日常にどのようにフィードバックし、今後の生き方にどう活かすかを考える内容である。

事前準備においては極力生徒の主体的活動を重んじ、できる限り制限を取り払い活動時間の確保に力を注いだ。また活動を他人任せにならぬよう配慮し、少人数制の班構成や、個々に対する課題を取り入れ、生徒全員が参加する授業環境の整備に努めた。校外学習に関しては国ごとの対応になるため、それぞれの国の活動に対して事前学習を行った。

中間報告や振り返りに関しては、全ての生徒がプレゼンテーションによる発表を行い、あるいはディスカッションによる報告会を通して、自ら学んできたことを改めて考え、今後に生かすきっかけとした。

「出会い」とは言うなれば人生における日常ともいうべきものである。海外に出る、などと大それたことを言わなくとも、多かれ少なかれ人は日々何らかに「出会い」、その体験を通して何らかを「学んでいる」はずである。その無意識下にあるものを、今回の実践を通すことで意識の上に浮かび上がらせ、日常体験の中に多くの隠れた価値を見出し、自ら知的好奇心を呼び覚ますことこそ、上に記した目標を達成することではないか。

「本物との出会い」という体験をきっかけに、自らの世界（抽象度）を広げ、自らの可能性を広げること、それが今年度の「総合的な学習の時間」のねらいである。

### (3) 今後の展開に向けて

「総合的な学習の時間」で目指す目標は、いずれもパロメータ的な数値で表現することは本質的にできない。なぜなら共同性や創造性、自己の在り方などは本来人間における無意識下の個性ともいうべき領域であり、それを無理やり外在化させることは、極めて限定した視点からでしか評価できず、また各々の個性に平均値など存在しない。つまり伝達不能領域であるからである。それでもなお、この領域を表現するためにはその生徒の事前と事後を比較する以外にはなく、真の評価は生徒自身が持つ「実感（充実感・達成感）」と長年様子を見続けてきた教師による「実感（変化率・増幅率）」しかないであろう。

以上のことを前提として、各報告では生徒の感想の一例やプレゼンの様子、生徒の変容を発表している。その数値にできない評価を教員が鋭敏に読み取り、今回の活動内容が良いか悪いかの一元論ではなく、むしろ「卒業研究」に向けて活かすための素材にすることこそ、「総合的な学習の時間」におけるもっとも重要な要素であると考えつつ、今年度の活動詳細を報告したい。

【資料 1】

| 平成26年度「総合的な学習の時間」 年間指導計画表 | | | |
|---|---|---|---|
| 回 | 月日 | 単元 | 内容 |
| 1 | 4月12日 | ガイダンス | 総合全体ガイダンス |
| 2 | 4月26日 | 日本と出会う① | 活動計画1：班決定、テーマ設定 |
| 3 | 5月10日 | 日本と出会う② | 活動計画2：計画作成 |
| 4 | 5月24日 | 日本と出会う③ | 活動計画3：計画作成／事前審査① |
| 5 | 6月7日 | 日本と出会う④ | 活動計画4：発表会資料作成／事前審査② |
| 6 | 6月21日 | 日本と出会う⑤ | 計画発表会（対年次生徒） |
| 7 | 夏季休業中 | 日本と出会う⑥ | 各班活動実践 |
| 8 | 8月2日<br>（免許講習日） | 日本と出会う⑦ | 計画発表会（対免許講習参加者＆保護者） |
| 9 | 9月6日 | 日本と出会う⑧ | 活動報告会グループ発表 |
| 10 | 9月20日 | 世界と出会う① | 前半：校外学習に向けて<br>後半：日本と出会う代表発表会 |
| 11 | 10月4日 | 世界と出会う② | 地域理解/交流会準備 |
| 12 | 10月18日 | 世界と出会う③ | 地域理解/交流会準備 |
| 13 | 11月1日 | 世界と出会う④ | 地域理解/交流会準備 |
| 14 | 11月15日 | 世界と出会う⑤ | 英会話講座・JTB講話 |
| 15 | 1月10日 | 世界と出会う⑥ | 活動報告会 |
| 16 | 1月24日 | 卒業研究① | 卒業研究に向けて①<br>研究大会準備① |
| 17 | 2月7日 | 卒業研究② | 卒業研究に向けて②<br>研究大会準備② |
| 18 | 2月14日 | 卒業研究③ | 卒業生と語る会 |
| 19 | 2月19日 | 研究大会 | 「総合的な学習の時間」活動報告 |
| 20 | 2月21日 | 卒業研究④ | リクルート進路学習会<br>卒業研究構想発表会準備 |
| 21 | 3月13日 | 卒業研究⑤ | 卒業研究構想発表会 |

## 2．1学期「青春18切符で日本と出会う」報告

### （1）ねらい

2年次を迎えるにあたって、最初に担任団で話したことは「学校の外に出して体験を重視した活動をさせたい」というものであった。1年次における「産業社会と人間」「キャリアデザイン」では、取材やインタビュー、文献調査やプレゼン、ディスカッションといった、学習活動の基本的スキルを学んできたが、その経験を実際に活かしたいという思いがあった。また広い世界に目を向けて自主的な活動をすることで、学校の中では得られない多くの学びをさせたいという願いもある。

そのような思いの中、12月には海外への校外学習が控えているということもあり、その前段階の予行演習の意味合いも含め「日本を旅する」という自由奔放な授業計画に至った。大人になれば誰しも経験があるであろうが、「旅」は人を大きく成長させる。「かわいい子には旅をさせよ」の諺にあるように、特に若いときの「旅」はかけがえのないものである。計画する楽しさ。列車からの風景。現地での食事。人々の暖かさ。当日のトラブルも含め全てが予定調和にない、まさに「生きた学習」を目指そうという目論見である。

そのような学習の中で、生徒は一体何を持ち帰ってくるのか。それこそが本活動の意図するところである。

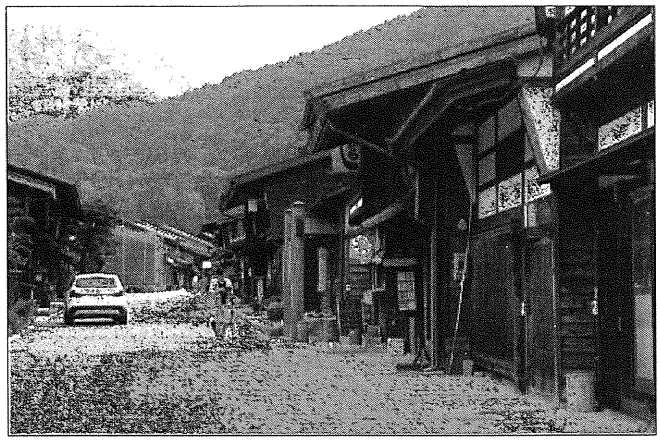
### （2）具体的な活動

主たるテーマは「日本を知る・日本と出会う」である。夏休みを利用し、JRが期間限定で販売している普通列車乗り放題の特別切符「青春18切符」を使って日本を旅し、各地の風土や歴史、人々や文化を身体で学ぼうという試みである。当初は宿泊を含め、北海道から沖縄まで、パスポートのいらない場所ならどこでも可という計画を提案したが、ここは様々な大人の事情により「日帰りで行けるエリア」にとどまった。

授業導入として、4月最初のガイダンスにおいて全体説明を行った。「青春18切符を使って、自分たちの好きなところに旅をしてきなさい」と説明したときの生徒の反応は予想通り、驚きと喜びと戸惑いの入り交じった雰囲気が感じられた。

しかしどの生徒もその目的は、ただ単に遊びに行くわけではないということはすぐに理解していたようである。教員側が期待している成果がどのようなものであるのか。それを生徒が感じられるのはこれまで培ってきた授業成果であり、そういった意味では1年次に行ってきた「産社・キャリアデザイン」の学習内容が活きているのが見て取れた。

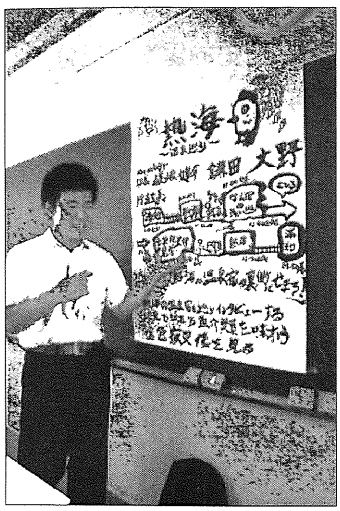
2回目の授業からはすぐに計画作りにとりかかる。班はなるべく少数で行動することを条件とし、最大4人までの班を好きな者同士で組ませた。人間関係であぶれてしまう生徒もいるかと心配もしたが、やはり気の合う仲間と行ってこそ旅は楽しい、という考



えからあえて生徒にまかせたところ、大きな問題もなく班分けを決めることができた。計画は、まず自分たちの旅の目的を表した「題名（キャッチコピー）」を考えさせることから始まった（資料2参照）。これにより自分たちのテーマを与え、そこから「何処へ、何を、何のために」行くのかを考えさせた。交通経路や時刻表、経費も当然自分たちで調べ、詳細に記したものを「活動申請書」に記載していく。活動予定はある程度は決めさせるものの、現地で面白いものや立ち寄りたい箇所に出会ったと場合はある程度

寄り道してもよいという自由度をもたせた。完成した計画は、教員による審査会において生徒が旅の目的や内容を説明し、そこで認可を得られたもののみに活動を許可した。中には許可が下りず数回計画を練り直した班もあったがそれも意義あることと考えている。

8 月に本校が毎年行っている教員免許状更新講習において「計画発表会ポスターセッション」を行った。各班がそれぞれブースを作り、来校した先生や保護者を相手に自分たちの旅計画を説明し発表するというものである。やはり自分たちなりに考えた計画であるため、多くの班が熱のこもった発表を行っていた。

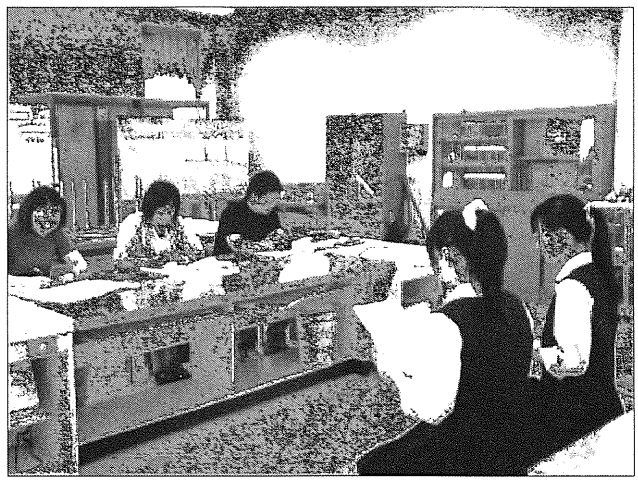


夏休みは、いよいよ活動である。活動する日は班によってまちまちであるため、担当の教員が待機し、出発時と到着時に電話連絡をするという確認のもと行った。生徒達が訪れたエリアは、千葉、神奈川、山梨、長野、福島の関東近県であり文化遺産巡りや、果樹園の視察、海産物巡りなど、バラエティーに富んだ内容となった。

実際の様子は生徒のみの活動であるため詳細は分からないが、帰ってきたあとの反応を見ると多くの班が「楽しかった！」というのが第一声であった。もちろん学習であるため、ただ遊びに行っただけでは困るのだが、まずは「楽しい」という体験が全ての始まりであり、ほとんどの生徒が充実した 1 日になった様子である。

全ての班が無事に活動を終え、2 学期はじめに「活動報告会」を行った。各自で記録してきた写真や取材内容をもとにプレゼンテーションを行い活動内容を発表した。各班の中から最も優れた発表を生徒による投票で決め、さらにそこで選ばれた代表班による代表発表会を行い、全活動のまとめとした。

### （3）活動の成果



極めて自由な条件の中で、生徒はどのようなレベルの成果を持ち帰ってくるのか。授業者の関心はそこに尽きた。1 年次生からの活動のおかげで、レポートやプレゼンテーションはどの班もある程度まとまった形式で行っていた。また、実際の活動もどの班も大きなトラブルはなく予定通りに行動できた。しかし活動報告会を見る限りでは、それぞれが決めたテーマをどこまで掘り下げられたかというといささか心許なく、班によって差が大きく出るという結果になったと考えている。

やはり多くの班は、「計画通りに目的地に行く」ということが先んじて、テーマの表層をぬぐっただけで終わってしまった感があるのは否めない。しかし

先に記した通り、「体験的学習」によって得られたものは大きいはずである。今回の体験による成果がいつ発揮されるかは分からない。そういった意味で今回の試みは今後も検証を続けるべき内容であり、生徒の振り返りや様子を見る限りでは、その意義は非常に大きいものであると考えている。

【資料2】

# 『青春18切符で日本と出会う！』

## ～日本各地の風土・文化・産業を体感する～

*いざ、ニッポンを知る旅へ。仲間と共にこの国を歩く――*

主たるテーマは「日本を知る・日本と出会う」です。歴史、風土、文化、時間…。仲間と共にこの国を歩き、道中で出会う全てのものを通して、日本を知り、世界を知り、人間を知ります。校外学習への助走として、研究活動の素養つくりとして、自分が住むこの国に関心をもち、本物の姿を感じること。それが今回の活動です。これまで学習してきたことを総動員し、知的好奇心を広げ、課題に取り組みましょう！

### 1. 具体的な活動

夏休みの一日を利用して、日本各地に実際に訪れて、との場所の風土や文化、人々、歴史的建造物を体感してもらいます。班ごと別れてテーマ、目的、取材や調査対象を班員で話し合い、目的地を決定します。「青春18切符」を1日分配布しますので、この切符を駆使して交通経路や時間を考え、目的地に向けて計画を練って下さい。各担当の先生のアドバイスのもと、主題である「日本と出会う」を踏まえた上で、中身の充実した高い次元での計画と実行を期待します！

### 2. 青春18切符について

「青春18切符」とはJRが発行している特別切符で、JR線が1日乗り放題できるもの。ただし、特急や新幹線などの特急券が必要な車両には利用できません。うまく利用するとかなり遠方まで行くことができます。またこの切符に合わせ、各自負担で特急やバスなどの利用をすることも構いません。

### 3. 班づくりについて

班は2人～4人までです。班のメンバーは個々で話し合って決めてください。メンバーが決まった班は班長を選出し、教室に置かれているメンバー登録用紙に記入して各担任まで提出してください。

### 4. 活動予定

| | 月日 | 内容 | 説明 |
|---|---|---|---|
| 1 | 4月12日 | 総合全体ガイダンス | 1年間で学ぶ総合の内容説明、1学期の活動の説明 |
| 2 | 4月26日 | 班割り振り･旅テーマ決め | 班づくり、班毎にテーマ決め |
| 3 | 5月10日 | 活動計画づくり① | 活動計画を班ごとに制作する |
| 4 | 5月24日 | 活動計画づくり②/計画審査① | 活動計画を班ごとに制作する／計画審査を受ける |
| 5 | 6月7日 | 計画発表会資料作り/計画審査② | 計画審査をうける／計画発表に向けた資料を作る |
| 6 | 6月21日 | 計画発表会 | 各班の計画内容を発表する。 |
| | 夏季休業中 | 校外活動 | 計画に沿って活動を実行する。 |
| 7 | 8月2日 | 計画内容発表会 | 免許状更新講習にて、計画内容を発表する。 |
| 8 | 9月2日 | 実施報告会 | 実施内容を発表する。 |

*目的も、行き先も、行動も、全ては自分たちで決める。*

*――――例えば、こんな計画はいかがですか。*

計画する上で大切になことは、
「主たるテーマに則した目的を、高い次元で計画し実現する」ことです。
教員側が何を要求しているか、どのレベルのものを期待しているかは、「産社」を学んだ君達なら分かることと思います。限られた条件と時間の中で、最大限のアイデアと打ち合わせを繰り返し、目的を達成させてください。その全過程から、数字や言葉では言い表せない、人生においてかけがえのない体験を会得することできるでしょう！

*見本プラン No.1『ものづくり最前線！京葉工業地帯で工場に萌える！』*

*見本プラン No.2『日本一のコシヒカリを食す！魚沼市米作りの達人を訪ねて。』*

*見本プラン No.3『戦国の勇、北条早雲が眠る小田原城を訪ねる！』*

*見本プラン No.4『ペリーよ、この国で何を見た？黒船が現れし浦賀港を見る！』*

*見本プラン No.5『なるか？世界遺産！日本初の繊維工場、富岡製糸場に行く！』*

*見本プラン No.6『究極のエンジンはどこへゆく？目指すは浜岡原子力発電所！』*

5. 実施に当たっての留意事項

① 保護者には事前に計画内容を確認してもらい、実施の同意を得る。
② 実施計画は審査が通り許可が下りた班のみ実施する。
③ 出発時及び帰着時には電話連絡による確認を行う。
④ 実施期間は夏季休業中（青春 18 切符使用可能期間）に担当教員と相談の上決定する。
⑤ 班の構成は２人～４人とする。
⑥ 鉄道外のバスやタクシーなどの交通機関（飛行機を除く）も自己負担の上なら原則可とする。

*歩け。歩け。前へ歩き続ける限り、余生はいらない。*

*――――伊能忠敬*

## ３．２学期「世界と出会う」報告
## オーストラリア・インドネシア・台湾校外学習

### ３－１　オーストラリア

#### （１）日程

本年度のオーストラリア校外学習は、生徒 119 名（男子 51 名、女子 68 名）、引率教員４名である。日程は昨年度とほぼ同じであるが、行き先はオーストラリアのゴールドコーストである。日程表を下記の表１に記す。

#### （２）本年度の特色ある取り組み

本年度の校外学習の目的は以下の２つである。

・自文化とは異なる文化との個人的・直接的な交流を通じて、自文化について学びあい、また、多文化共生への視点を養う。

・自文化とは異なる多様な社会環境・自然環境を体験し、国際的視野を広げる。

選択制による校外学習の２年目である本年度は、この目的をいかに継続発展させていくかを念頭に、オーストラリアではアクティビティを数種類用意し、個別に選択し体験することにした。また、ファームステイについても選択制にした。さらに、この校外学習では他の国を選択した生徒も共通課題として、各自訪れる国の自然・環境や文化などから自分なりのテーマを見つけ調査・体験をするといった活動を取り入れた。これは、より多くの生徒に主体的に活動に参加してほしいという強い願いがあったこと、活動に対する生徒一人一人の関わりが深まるのではないかという思いからである。

#### （３）事前学習

事前学習の時間として、「総合的な学習の時間」とLHR を活用し、実施した。

**①共通課題のテーマ**

共通課題である各国においての自然・環境や文化などから自分なりのテーマを見つけることも一人ひとりが責任を持ってテーマに向き合ってもらいたい思いがあった。生徒各々に自分のテーマをプレゼンテーションさせ、日本で出来る調べ学習を進めた。次に、実際に訪れて、いつどこで調査や体験が出来るのか考えるところまで準備させた。

**②アクティビティとファームステイ**

プログラム３日目のモートン島でのアクティビティについては、数種類用意し生徒各自に選択させた。これらについては、事前にそれぞれの内容を映像で伝え、どれを選ぶかは生徒自身に責任を持って選択させた。生徒各自も事前に調べ、このアクティビティをどのように組み合わせて一日を過ごすのか真剣

| 日 | 月日 | 地名 | スケジュール |
|---|---|---|---|
| 1 | 12/6<br>(土) | 成田空港発 | 成田空港にて搭乗手続き・出国手続き<br>ジェットスター航空にてゴールドコースト空港へ |
| 2 | 12/7<br>(日) | ゴールドコースト空港着<br>ブリスベン市内<br>モートン島 | 入国手続き後バスで移動<br>ローンパインコアラ保護区、マウントクーサ展望台、ブリスベン市内散策、船でﾓｰﾄﾝ島へ |
| 3 | 12/8<br>(月) | モートン島 | 全員：マリンプレゼンテーション聴講<br>各自選択：アクティビティ<br>部屋ごとのグループ：クイズラリー |
| 4 | 12/9<br>(火) | ゴールドコースト市内<br>ファームステイ | ①　ゴールドコースト市内散策<br>②　ファームステイ体験 |
| 5 | 12/10<br>(水) | ゴールドコースト空港発<br>成田空港着 | ゴールドコースト空港にて出国手続き<br>成田空港にて入国手続き、税関手続き、解散 |

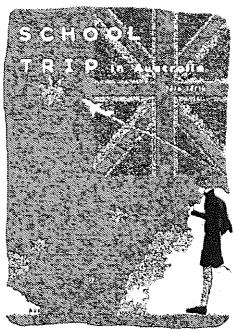
表１．オーストラリア校外学習日程表

に選んでいた。

プログラム４日目については、ファームステイをするのかゴールドコースト市内を散策するのかも生徒各自に選択させた。希望者は119名中28名（男子３名、女子 25 名）であった。3～5人のグループにし、7グループ編成でファームステイを体験した。

③しおり作成

各クラスの「総合的な学習の時間」係がしおりの作成を行った。しおりの内容については、昨年度のものを参考にどのような内容を入れるか検討させた。その結果、基本情報の他、生活習慣やマナー、すぐに役立つ英語などを取り入れることになった。作成の時間は昼休みと放課後を利用した。しおり係の生徒 17 人が責任を持って作成できるよう一人１ページを担当し作成した。




しおり表紙

④英会話学習・異文化理解講話

「総合的な学習の時間」に英会話学習と異文化理解の講演会を取り入れた。

（４）生徒の様子

①共通課題のテーマ

自分で設けたテーマについて、事前にアンケート用紙を用意したり、インタビューで行う質問項目を練ったりと自らの課題テーマに対して意欲的に取り組んでいる姿勢が見られた。市内散策の時間に慣れない英語でインタビューをしている生徒、日本とオーストラリアの違いを写真に撮る生徒、それぞれが真剣に取り組んでいた。自分の目で確認し、肌で感じることは、この校外学習においてとても意義あることである。日本とオーストラリアを比較でき、大変有意義な活動ができたようである。

○バリアフリーの違い（横断歩道の信号の点滅や音、歩道と車道の段差など）
○ｽｰﾊﾟｰやｺﾝﾋﾞﾆでの陳列方法は日本と違うのか
○オーストラリア人の気質を表す「マイトシップ」と日本人の気質
○日本とｵｰｽﾄﾗﾘｱの水族館に違いはあるのか
○ｵｰｽﾄﾗﾘｱでの人気車種は日本と違うのか

表２　共通課題のテーマ例

②アクティビティ

数種類のアクティビティは無料のものから有料（600円～6000円位）のものまであるので、生徒は金額も考えながら何種類かを選択し体験した。モートン島は98%が砂で出来ている島なので、砂を使ったアクティビティや海でのアクティビティが多かったようである。このモートン島での体験は、日本にはないオーストラリアの自然や文化を肌で感じとることが出来たと思う。アクティビティとアクティビティの合間の時間を使って、この島ならではのクイズラリーに参加した。クイズは「私たちが宿泊したホテルにあるエレベーターの最大積載量は何kg？ペリカンの写真を撮ってくる。オーストラリアの先住民族の英語名称を英語で答える」など20問が出題され、生徒たちは島の端から端までを歩き回り答えを探し、写真に撮ったりして楽しんでいた。

【有料】シュノーケリングツアー・デザートサファリ４WDツアー・バナナボート体験・ＡＴＶ４輪バイクツアー・釣り具レンタル・ブッシュタッカーウォーク・セグウェイツアー・カヤックツアー・
【無料】テニス・スカッシュ・卓球・ビーチバレー

表３　アクティビティの種類

③ファームステイ

ファームステイ体験は、たった１泊であったが、それぞれ生徒にとって初めて他国の人と生活することで、異文化理解としては大成功であったと感じる。慣れない英語を駆使して自分の意思を伝えることがどれほど大変であったか、また日常生活でちょ

っとしたことが日本と違うことに多くの生徒がそれぞれの感想を述べている。

**④ブリスベン市内散策、ゴールドコースト市内散策**

初日のブリスベン市内散策の大きな目的は、島に渡る前に水を買っておくということである。ここでは集合時間と集合場所、活動エリアの確認をした上で自由散策とした。現地ガイドから聞いたスーパーに行くと生徒たちが水を買っていた。特に戸惑う様子もなく堂々としているのに驚いた。最終日のゴールドコースト市内散策でも集合時間と場所、活動エリアを確認し自由散策とした。昼食を各自でとるのだが、ここでも特に戸惑っている生徒を見ることはなかった。

市内散策をしながら積極的にインタビューをしたり街頭アンケートをしている生徒が多数おり、校外学習に対する取り組みの意識の高さを感じた。

### ３－２　インドネシア校外学習

**（１）はじめに**

インドネシアへの校外学習は、ホームステイの受け入れ先で本校と姉妹校であるコルニタ高校が期末考査中との事情から、オーストラリアや台湾から約２週間後に設定された。

本年度は男子５名・女子７名の計 12 名が参加し、引率教員２名に加えて羽田から看護師１名が同行した。生徒が３カ所の中からインドネシアを選択した理由は、インドネシアの文化や宗教、産業に興味があるという予想できるものから、自分では行かなさそう、他の地域に比べて少人数である、親が興味を持ち強く薦められたという想定外のものまで様々であった。

日程は、空港が成田から羽田に変わった以外は昨年度とほぼ同じである。出発前日には、搭乗便が早く便数も少ないため、羽田空港の近くに宿泊した。ジャカルタでホテルに泊まった後は、コルニタ高校があるボゴールに移動し、3 泊のホームステイを行う。なお 21 日・22 日のプログラムはコルニタ高校ののの生徒（ホストファミリーや生徒会役員、本校から留学中の３年次生）と共に行った。

| | 月日 | 場　所 | 内　容 |
|---|---|---|---|
| 1 | 12/18<br>（木） | 羽田 | 19:00　各自集合<br>ﾎﾃﾙに前泊 |
| 2 | 12/19<br>（金） | 羽田空港<br>ジャカルタ | 10:10　NH855 便<br>ﾚｽﾄﾗﾝで夕食、ﾎﾃﾙ泊 |
| 3 | 12/20<br>（土） | ジャカルタ<br>ボゴール | ﾊﾞｽでｺﾙﾆﾀ高校へ。交流会<br>午後はﾎｽﾄﾌｧﾐﾘｰと過ごす |
| 4 | 12/21<br>（日） | ボゴール | ﾊﾞﾃｨｯｸ体験<br>午後はﾎｽﾄﾌｧﾐﾘｰと過ごす |
| 5 | 12/22<br>（月） | ボゴール | ｸﾞﾇﾝﾃﾞﾊﾟﾝﾗﾝｺﾞ国立公園散策<br>ﾀﾏﾝｻﾌｧﾘ見学 |
| 6 | 12/23<br>（火） | ボゴール<br>ジャカルタ | ｺﾙﾆﾀ高校でお別れﾊﾟｰﾃｨｰ<br>ﾀﾏﾝﾐﾆ見学<br>昼食・ふりかえり、買い物<br>21:35　NH856 便 |
| 7 | 12/24<br>（水） | 羽田空港 | 入国、税関手続き後、解散 |

**表１　インドネシア校外学習日程表**

**（２）事前学習**

昨年度は１学期の「総合的な学習の時間」から、インドネシア語講座はもとより歴史や食文化、産業の学習、大豆・米の栽培、留学生との交流など事前学習に十分な時間を割き、10 月には来日したコルニタ生とともに合宿も行った。詳細は、平野延行ほか（2014）を参照されたい[(1)]。しかし、「総合的な学習の時間」内の活動では１人の教員が担当する生徒数の関係でインドネシア校外学習を選択した生徒以外も含めなければならないこと、本年度は１学期は日本、２学期は世界という共通の大テーマを設けたことから、２学期の「総合的な学習の時間」と LHR の時間を使って本格的な学習に入ることにした。表２に、２学期以降の授業時間内に行った活動を示す。

| 日（時） | 種別 | 内容 |
|---|---|---|
| 9/20(3) | 総学 | 文化祭企画のふりかえり |
| 10/4(1-3) | 総学 | 「国際ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ」体験者の報告、今後の活動の確認 |
| 10/8(6) | LHR | ｺﾙﾆﾀ生歓迎行事の班分け |
| 10/15（6） | LHR | 班ごとに内容の検討 |
| 10/18(1-3) | 総学 | ｺﾙﾆﾀ生歓迎行事の確認、教員によるｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語講座 |
| 11/1(1-3) | 総学 | ｺﾙﾆﾀ生と会話練習、交流会の出し物検討 |
| 11/12(6) | LHR | しおりの内容検討、分担 |
| 11/19(6)<br>12/3(6) | LHR | しおり作成、出し物の練習 |
| 12/5(5-6) | 特別 | 出し物の練習、しおり作成・提出 |
| 12/10<br>(終日) | 特別 | しおり製本・読み合わせ、ｺﾙﾆﾀ高校とｽｶｲﾌﾟ（交流会打ち合わせ）、出し物の練習 |

表２　２学期の事前学習一覧

なお表中の 12 月 5 日と 10 日は、オーストラリア・台湾班の校外学習中の活動である。

実際には、9 月の文化祭にインドネシア紹介の展示及び食品販売の企画を出すため、夏休み前から準備が始まった。また 2 学期に入ってからも、「総合的な学習の時間」で事前学習に充てられたのは 3 回（計 9 時間）であったため、放課後に活動することも多かった。これらの活動は、参加生徒の中で決めた校外学習委員長と副委員長が教員の指示や自らの判断でメンバーを集め、生徒主体で行っていた。以下、2 学期に行った主な取り組みを紹介する。

### ①インドネシア語の学習

コルニタ高校では日本語の授業があるものの、日本語力にはかなり差がある。また生徒どうしは何とか英語で話せても、ホストファミリーの親はインドネシア語しか話さないという場合もある。そこで、青年海外協力隊・現職教員特別参加制度でインドネシアに派遣された本校教員が講師となり、発音・簡単なあいさつ・自己紹介の表現等を指導した。

コルニタ生との会話練習

昨年度は、早い時期から取り組み、本校教員の講座以外にも本校近隣の大学に留学しているインドネシア人に講師を頼むなどして、ある程度の時間が確保できた。しかし今年は時間数の少なさに加えて、本校教員の出張やコルニタ生の引率で来日した教員の緊急帰国などにより、十分な時間が取れなかった。

それでも、コルニタ生来日中の 11 月 1 日にはコルニタ生 1 名に対し本校生 1、2 名で会話練習を行った。1 対 2 ではコルニタ生があいさつや表現を教え、マンツーマンの場合は英語・インドネシア語を駆使して自由に会話する組が多かった。

### ②来日したコルニタ生の歓迎行事

本校主催の高校生国際 ESD シンポジウムに合わせて 10 月 21 日から 11 月 15 日まで、コルニタ高校から生徒 8 名・教員 1 名が来日することになった。そこで生徒たちで話し合い、以下の 3 班に分かれて準備を行った。

**（a）到着時の歓迎会**

来日初日の午後、本校に到着してホストファミリーが迎えに来るまでの歓迎会を企画・運営した。なお、翌朝の全校での歓迎会は国際教育推進委員会が主体となって行っている。当日は多目的交流棟を会場に、互いの自己紹介とゲームで交流した。英語での司会、ゲームの説明に苦戦しつつ、8 月に「国際フィールドワーク」でインドネシアに派遣された 3 年次生の力を借りて会を進めていた。

**（b）部活動紹介**

11 月 4 日と 5 日の放課後に、本校の部活動を紹介

した。インドネシア人が興味を持ちそうな部活動の選定、顧問や生徒リーダーへ見学・体験の交渉、当日の動きの計画などを行った。

（c）芋煮会

前述の高校生国際 ESD シンポジウムでは、コルニタ高校以外に他のインドネシアの高校、タイ、フィリピンの高校生も来日した。これらの生徒に向けて、シンポジウムのリハーサルの日に特徴的な日本の料理をふるまう目的で芋煮会を開いた。70 名分の調理は計画も難しかったと思うが、試作して検討し、当日は早朝に集まって準備した結果、大好評であった。終了後は日が暮れる中、後片付けを行ったが、外国のお客様が喜ぶ姿にやりがいを感じたようである。

③渡航に向けて

コルニタ高校到着初日に、生徒や保護者に向けて発表を行うことになった。昨年度の様子や来日していたコルニタ生の意見を参考に、JKT48 で馴染み深い AKB48「会いたかった」のダンス、インドネシアで人気がある「心の友」の合唱、学校紹介を出し物とし、それぞれに活動のリーダーを決めて準備にあたった。当日コルニタ高校は学期末の成績表を担任が渡し二者面談を行う保護者会の日であり、上記の出し物は言わばオフィシャルな場で発表するためのものである。

それ以外にホストファミリーや生徒会役員など活動を共にするコルニタ生約 20 名との交流会があり、日本の遊びとして「だるまさんが転んだ」などいくつかのゲームと英語での紹介を用意した。

またしおりについては、昨年度の目次をもとにどのような内容にすべきかを検討させた。その結果、昨年度までの基本情報や訪問地、便利な表現以外にマナーやタブーが知りたいとの要望があったため内容に加え、項目ごとに分担して執筆させた。

（3）現地にて

①コルニタ高校との交流

コルニタ高校到着後の交流会から 2、3 日目のプログラム、3 泊のホームステイ、最終日のお別れパーティーまで、コルニタ高校の生徒や家族との交流に十分な時間があった。コルニタ生は親切で明るく、本校生に積極的に声をかけてくれていた。お別れパーティーにはホストファミリーも参加しており、その様子から家庭でも温かく迎えてくれたことがうかがえた。本校生どうしで固まってしまったり、受身であったりする生徒もいたが、基本的にはバディや現地の生徒と共に活動し、交流が楽しいと思えたようである。

②文化体験

今年はボゴール 2 日目の午前中に、コルニタ高校教員の紹介でバティック（染め物）体験を行った。本校生とバディ生徒が隣り合って座り、講師のインドネシア語を英語に翻訳して説明したり、遅いほうを手伝ったりしながら、1 人 1 枚のオリジナルバティックを完成させた。共同で同じ作業をすることで親近感が深まる。このような体験は交流の初めの時点では有効であろう。

バティック体験

③自然体験

昨年度と同様、ボゴール 3 日目には国立公園とタマンサファリを訪問した。本年は天候に恵まれ、熱帯雨林の公園内を散策することができた。もっとも散策の帰路には大雨に降られ、雨季の凄まじいスコールも体験することとなった。他にタマンサファリでは象を、タマンミニではコモドオオトカゲを間近で見たり触ったりして、動物にも接することができた。

国立公園を歩く

（４）おわりに

①交流中心の校外学習

昨年度の報告で「SGH（スーパーグローバルハイスクール：筆者注）では協働学習を、校外学習では交流中心でと役割をわけて実施するとよいかもしれない」[(2)]とある通り、本年度は事前学習が少なく、共通課題に取り組むようなプロジェクト学習もなく、交流中心の実施となった。しかし自分と異なる文化との交流や環境の体験を通して、日本で暮らすだけでは気づかなかった視点を得られたという点においては、校外学習のねらいを達成できたと言える。

②役割分担に関して

インドネシアに勤務経験がある教員と年次の担任が、どのような役割分担で進めていくかという点では課題も残った。当教員が不在だと講義や語学の指導ができず、生徒の自主的学習か話し合いになってしまう。教員間の意思疎通が図れず、指示が異なって生徒を混乱させたこともあった。例えば、コルニタ高校での交流会は学校全体対象と少人数対象と２通り考えなければならなかったが、担任が理解していなかったため、決定後に検討し直す必要があった。また現地との交渉も当教員が行っており、１人に頼った手配である点も問題である。今回は２名の引率のみで１人に何かがあった時に１人しか対応できる教員がおらず、オーストラリアや台湾のように添乗員や現地支社の支えがある、言葉に不自由しない等の条件がなければ校外学習の遂行自体が難しくなる。そうかと言って生徒12名に３名の教員が付くと、他の多人数の地域にしわ寄せがいく。実際に体験してみると、３カ所で生徒160名に対し担任団８名管理職１名の引率はかなり厳しいと言わざるを得ない。

一方、生徒は少人数のグループだったため概ね協力して活動できたが、統括役へは負担がかかった。

③生徒の変容

事前学習や現地での体験を通して、大きな成長が見られた。コルニタ生来日時の歓迎会では教員の指示を仰いでいたが、芋煮会や訪問時の交流会の進行は生徒自身の判断で行っていた。これは数々の行事を生徒自身が企画・実行した成果であろう。少人数編制で、１人の責任が大きい点もあげられる。また非母語によるコミュニケーション状況に強制的に置かれることで、言語に限らず何とか意思を伝えようとする姿勢が見られた。さらに、異文化にたくましく適応していく姿も特記すべき点である。トイレや風呂など日本と全く異なる生活環境に、初めは衝撃を受けホームシックにもかかったようだが、何回も使うことで慣れていき、楽しみを見つけられるようになった。出発前に「行きたくない」と言っていた生徒が、最終日のふりかえりでは「また来たい」と笑顔で話す様子が印象的だった。以下は生徒のしおりからの引用である。

・インドネシアでの自分に驚いた。インドネシア式のトイレ・風呂でも慣れればどうってことないし、何とも思わない。虫が大嫌いなのに小アリに驚かなくなり、手で払うこともできた。また人見知りな私にもどんどん話しかけてきてくれるので、初めて会った人（乗り合いバスの運転手等）とも気軽に会話することができた。異文化体験は自分の意外な一面を発見でき、良い経験ばかりだった。（女子）

・コルニタ生との交流も良い思い出となったが、日本より不衛生な光景も忘れられない記憶となった。しかし大量の虫もゴミの異臭も人間もインドネシアの生活になくてはならないもので、全てが複雑に壮大に循環し、日本人よりインドネシア人は自然と共生していると帰国してから思った。（男子）

このように、自己を見つめ直したり体験を自分なりに意味づけようとしたりする記述も見られた。

12名のチームワークは、出発前はやや薄いように思われた。しかしホームステイというなかなかハードな体験を共有し、明るく優しいコルニタ生も加えて濃密な3日間を過ごしたせいか、最終日に本校生だけになったバスの中は和やかな雰囲気になっていた。

### 3－3　台湾校外学習

#### （1）概要

校外学習台湾班は男子14名、女子13名の計27名での4泊5日の活動となった。昨年度より始まった3か国にまたがる校外学習の2年目として、前年の活動内容を踏襲しつつ、新たな発展的試みに努めた。台湾は地理的にも近隣国であり、経済的にも関係が深く、親日感情の強い国民性である。比較的治安もよく街並みも日本に似た雰囲気であり、高校生の校外学習の場としては非常に安全性の高い国である。4泊5日の行程の主な内容は表1のとおりである。

| 月日 | 場　所 | 活動内容 |
|---|---|---|
| 12/6<br>（土） | 羽田～台北 | 羽田空港集合・出国／台北松本空港着　入国<br>中正紀念堂、龍山寺見学、士林夜市見学<br>ホテル泊 |
| 12/7<br>（日） | 台北 | 台北市内班別自由活動<br>ホテル泊 |
| 12/8<br>（月） | 台北～台中<br>新民高級中学 | 新幹線にて台中へ<br>新民高級中学と交流会①<br>ホームステイ泊 |
| 12/9<br>（火） | 新民高級中学 | 新民高級中学と交流会②<br>ホームステイ泊 |
| 12/10<br>（水） | 新民高級中学<br>台北<br>羽田空港 | 新民高級中学出発<br>台北松山空港到着<br>日本入国後、解散 |

表1　台湾校外学習日程表

#### （2）事前学習について

台湾5日間の中で主な活動として、前半は台北市観光、後半は新民高級中学校との交流会を計画した。前半の台北市観光では、特に2日目は班による完全な自由行動とした。台北市は基本的に地下鉄をはじめとした交通網が発展しており、台北駅を中心に放射状に街が広がっている。そのためどの方面にも出やすく、また地下鉄運賃も安価なため生徒の自由活動を行うには非常に適した街である。

事前学習の課題として一つ目はこの自由活動の計画を行った。各班4～5人程度の班となり観光場所や経路をそれぞれ計画する。現地の地理感覚は日本と違うために、それぞれ不安要素はあったが、1学期に行った「青春18切符で日本と出会う」の活動が活かされているのか、班ごとに力を合わせて計画することができた。

もう一つの課題は後半の新民高級中学との交流会での準備である。交流会において本校からの出し物の一つとして、日本をテーマにそれぞれの生徒が題材を選び、プレゼンテーションを考えた。内容や形式は自由であるが、日本の伝統的な文化や建築物、日本の遊びや食事、ジャパニメーションなど多岐にわたったプレゼンが用意された。

個々の生徒においては活動意欲や活動内容に差はあるものの、大きな制約もつけず自由な発想を促したところ、各自が自主的に準備を行っていた。

#### （3）現地にて

**①前半（出国～台北市観光）**

初日は午前中に羽田空港から出国し、予定通りのフライトで台北市に着いた。第一日目の行動は蒋介石を祭った中正記念堂や、道教の寺である龍山寺、そして台湾の象徴ともいえる夜市をバスで回った。初日ということで緊張や飛行機の疲れも見られたが、それぞれ印象的な観光場所であり、生徒達は興味深く回っていた。この日はレストランで食事後、ホテルに入りすぐに就寝となった。

2日目は事前学習で準備していた班による台北市内自由行動である。

中正記念堂を見学

朝食後、それぞれ班毎にロビーに集まり、目的地に向けて出発する。目的地は班によりそれぞれ方向が異なるため、ほとんど単独班による行動となった。主な見学先は、故宮博物館や高層ビルの台北 101、台北市動物園や、繁華街である西門、占い横丁などであった。

途中バスの乗り方などで困っている場合でも、現地の人が優しく教えてくれたそうだ。班によっては時間配分の感覚が分からず、ずいぶん早くホテルに戻ってきてしまったところもあったが、全ての班が計画を無事に終えることができた。

道教の寺・龍山寺にて

②後半（新民高級中学校交流会）

3 日目からはいよいよ校外学習の目的である「新民高級中学との交流会」が始まる。台湾高速鉄道にて台中市に向かう。その後バスで移動し、新民高級中学に到着した。バスを降りるなり、吹奏楽部の演奏と日本語学科生の出迎えで熱烈な歓迎を受けた。その歓迎に本校生は圧倒され、嬉しさと驚きで固まっていたのが印象的であった。

その後、控室で昼食をとった後、広間でこれから交流する日本語学科の生徒と対面した。新民の生徒の中には昨年交流した三年生も混ざっており、前回の交流の経験から率先して本校生を案内してくれた。

簡単な対面式を済ませた後、アイスブレイクを行った。緊張気味の本校生に対し、新民の生徒は非常にエネルギッシュであり、またフレンドリーに接してくれたため徐々に緊張がとれ、しばらくすると会場全体が打ち解けて笑顔と笑い声に溢れていた。

アイスブレイクでお互いすぐに打ち解けた

その後、ホームステイバディの顔合わせとなった。呼ばれてペアになった生徒はお互い挨拶と握手を交わし、それぞれのホームルームに散って行った。ホームルームではレクリエーションや部活動に参加した。最初の出会いとしてはとてもいい雰囲気であった。生徒はそのままホームステイバディとともに帰宅しそれぞれの家で楽しい夜を過ごしたようである。

ホームステイバディと対面

2 日目の交流は「日本と台湾」の文化交流をテーマに、共同活動を行った。1 時間目に国際会議場と呼

ばれる大型のホールになっている教室で開会式を行った。

まず双方から代表生徒による挨拶と出し物をセレモニーとして行い、本日の活動の説明を行う。この日の活動で試みたことは、筑坂と新民の生徒が合同となって班を作り、班で協力して「日本と台湾をテーマに、一日かけて何かを作り上げ、最後に舞台発表する」というものである。この「何か」は基本的に何でもよく制限はもうけない。ただし生徒に伝えたことは、テーマを良く考え、班での十分な話し合いのもと、レベルの高い創作をしてほしいという思いである。この課題は非常に自由度が高い分、どのような結果になるかわからない。しかしあくまでメインの目的は生徒同士の交流にあると考え、そのために双方で協力する時間を十分に確保したいという思いから計画した。

説明の後、班毎にそれぞれの部屋に分かれ、本校側から事前課題で用意した日本文化のプレゼンテーションを行った。内容としては、充実し新民の生徒の反応も良いものもあれば、内容が薄かったり、あるいは固すぎて退屈させてしまった発表もあった。しかし異国の地で、言葉の壁もある中で自分の国の紹介をすること自体に意義があり、そういった意味ではどの発表も価値あるものであったと考えている。そのプレゼンを皮切りに、各班は共同作業で「何か」を創作する作業に入る。最初はお互いアイデアが出ず、話し込んでいた様子であったが、そのうちダンスを練習し始めたり、模造紙で何やら作り始めたり、と具体的な作業が始まりだした。

アイデアを出しあって発表の創作物を考える

昼食もそのままの流れでとり、午後も引き続き作業を行う。残り時間があと少しという旨を伝えると、どの班も作業の完成に向けてラストスパートとなった。教員が危惧していたのは、途中で退屈になってしまったり、あるいはアイデアが出ずに作業が進まないといったことであるが、実際に行ってみると、終始会話が進んでおり、目的の交流活動自体はこの時点で達成できていたと言える。

午後 3 時から班毎の発表会が始まった。本校生司会の主導のもとそれぞれの班がアイデアを膨らませて作った内容が発表される。その内容の例としては、「創作ダンス」「日本と台湾の昔の遊び紹介」「映像制作」「伝統武道の型」などバラエティに富んだものとなった。

発表会を通して双方の交流が深められた

時間の関係で十分に見せられない班もあったが、全ての班が一応目標を達成できたと言える。

先生方から講評をもらったあと、この日はそのままホームルームに行き、そのままホームステイ先へ下校となった。ホームステイ最後の日ということもあり、夕方は新民の生徒に街を案内されて、どの生徒も楽しい夜を過ごしたようである。

5 日目の最終日は新民生とのお別れである。大教室でホームステイバディと共に一言ずつ全員があいさつした後、記念写真を撮り最後の別れを惜しんだ。やはり 2 日間ホームステイをした仲であるので、お互い情が移っており感動的な別れとなった。なかにはバスの中で号泣している生徒もいた。普段はそのようなそぶりを見せない生徒も、異国の地で人の温かさに触れたことに、それぞれに感じるものがあったのだろう。中には「5 日間すべて新民との交流で

もよかった」と言っている生徒もいたのが、印象的であった。

### （4）校外学習を振り返って

台北市内観光については、事前学習を含め、もう少し充実した内容にしたかったと反省している。授業時間確保が難しいということもあるが、班による自由行動の計画も交通経路のみでなく各観光名所の事前知識や背景など、もう少し突っ込んだ学習ができていると実際に見たときの学習効果も変わってきたのではないかと思っている。また、活動日が日曜日であったため、休館日であったり、また非常に混んでいて十分に見学できない場所もあった。しかし、初めての海外で生徒のみで行動するということが第一の目的であるため、そういった意味では目標は十分に達成できた。

新民高級中学校との交流会では、特筆すべきことは生徒の変容である。

今回参加した27名は、落ち着いた性格でどちらかというと内向的な生徒が多く、本人たちも実際に行くまでは非常に不安がっていた。海外経験が初めての者も多く、特にホームステイに関しては「したくない」と考えている生徒が多数いた。しかし実際に行ってみると、新民の生徒の温かさに本当に助けられ、不安が消えて非常に積極的な交流をすることができた。この「異国の地での人の温かさ」に触れられたという体験は極めて貴重なものであると考えている。台湾は知識では「親日」ということは知っていても、実際に体験する「親日」というのはこういうものだということを体で感じられたのではないか。本年度の「総合的な学習の時間」の目指す目標である「本物との出会い」の一つが、達成できたのではないかと考えている。

共同活動による創作物については、交流自体は生徒間で十分にとれてはいたもののやはり内容的にはテーマに則した部分が薄く、「面白おかしい出し物」で終わってしまった感は否めない。できれば高校生の若いアイデアを活かして、苦労しつつもテーマを絡めた独創性の高い内容を期待していた。しかし時間的制限もあり、また本校生は1年次から「産業社会と人間」や「キャリアデザイン」を通して発表慣れはしているものの、新民の生徒にとってはこういった自由度の高い授業自体が珍しいので、そういった意味ではお互いコミュニケーションを密にとり、よく頑張ったのではないかと考えている。

全体をあらためて振り返ってみると、わずか5日間の体験だが、生徒たちにとっては密度の濃い、非常に充実した5日間だったのではないかと思う。帰国後もしばらくはその余韻に浸っていたようで、チャンスがあればまた短期留学などで台湾を訪れたいと言っている生徒も何人かいた。

また文明の力であるスマートフォンは大したもので、帰国後も新民の生徒とお互いメール等をやり取りしているようである。良し悪しはともかく、こういう方法を通して世界と繋がり交流が続いていくということも、校外学習の一つの成果であると言えよう。この台湾校外学習が今後、進路や「卒業研究」をはじめ彼らにどのような影響があるかは分からない。しかしその体験はいつか必ず役に立つものであることは容易に想像でき、また同時に高校生でなければなかなか出来ない体験でもあった。そうしたことも含め、今年度の台湾校外学習は大きな成果を残せたと考えている。

## 3－4　「世界と出会う」報告会

インドネシア校外学習が年末に終わるのを待ち、1月10日の「総合的な学習の時間」で報告会を行った。公欠者を除いて1班8～9名の全18班を作ったが、班編制においては、クラスと地域のバランスに配慮した。地域の内訳はオーストラリア6～7名、アジア（インドネシア・台湾）2～3名である。報告会は以下のように進めた。

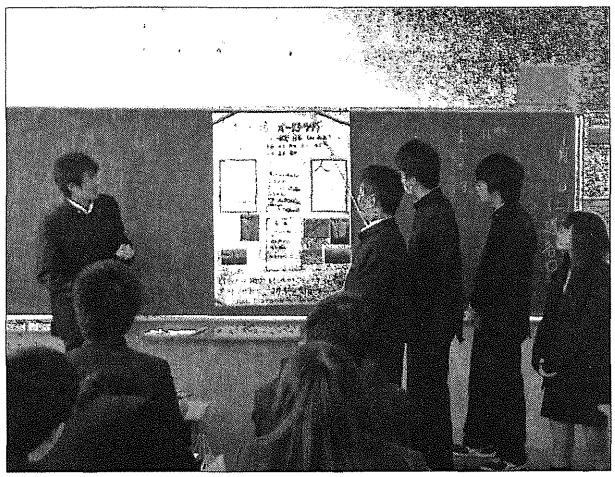
①事前学習で設定したテーマの調査や現地で体験したこと、そこから学んだこと・考えたことを個人でまとめる。

②班内で報告し合う。

③報告を踏まえ、「世界と日本」「これから世界でどう生きていくべきか」を話し合い、発表用資料として模造紙にまとめる。

④3班で発表会を行う。

「世界と出会う」の学習のねらいは、日本と世界が複雑につながっていることを知り・体験し、その中でこれから生きて行くにはどうすべきかを考えさせることにあった。そのために主体的なテーマ学習を設定し、しおりにも各地域共通の課題ページを作った。しかし最後の発表会を見る限りでは、そのねらいが達成できたとは言い難い。これは大多数の生徒にとって校外学習が初めての海外体験であり、世界と主体的にどう関わっていくかという想像がつきにくいこと、ワークシートの「発表を元に…話し合う」という手引きから各個人の報告を統合する形でのまとめになってしまったことによると考えられる。ねらいを達成するためには、指導案作成の時点で考慮が必要であった。



振り返り活動

発表会終了後に生徒が書いたふりかえりでは、同じ地域を訪問しても個人の注目する点が異なるため、より広い視野で訪問国が理解できたこと、自分が選ばなかった地域についても興味を持ったことに関する記述が多かった。特にインドネシアの報告は他地域を訪問した生徒にとって、印象深かったようである。また、英語学習に対する意欲もうかがえる。以下は、実際の記述である。

・同じ国でも様々な視点から調査していて、国の「感じ」みたいなものが良く見えた。その国の歩んできた歴史や環境、風土などが大きく影響しており、そこから個性が出ているのかと感じた。(男子)

・同じ国に行った人でも持つ印象は違うし、もちろん国ごとに環境は違うので、とてもたくさんの意見が聞けて充実した時間を過ごせました。確かに違う国の文化は好き・嫌いで言い表すこともできます。しかし、そこから自分がどう考えるか・行動するかが大切だと思いました。(女子)

・この活動を通して、それぞれの共通点や違いをたくさん知れて良かったです。これから私たちが世界と関わっていくには、コミュニケーション力、自分の意見をしっかり持つことが大切だと感じました。外国は自分の意見をしっかり持っていてYes・Noがはっきり言えて、他国の人にもフレンドリーな人が多かったので、日本も見習わなければいけないと思いました。(女子)

このように、その地域独自の文化が生まれる背景や世界でどう生きていくかという点まで考察できている生徒も、ある程度はいた。本年度よりスーパーグローバルハイスクールに指定され、交流やフィールドワーク等で海外に触れる機会は増えていくと思われる。それらの機会や「卒業研究」を通して、世界とのつながりや主体的な関わりについて今後も考えさせていきたい。

## ４．アンケート結果より

ここでは今年度の取り組みについて、生徒の自己評価を中心に見ていく。

2 年次担任団では生徒が入学する前に 3 年間で身につけさせたい能力や姿勢 15 項目を決め、継続してアンケートを実施している。昨年度は入学前と各学期末、今年度は年度末に行った。主体性、協働、知的好奇心等に関する各項目について「4：そう思う」「3：ややそう思う」「2：あまりそうは思わない」「1：そうは思わない」の 4 段階で回答させ、さらに 4・3 の肯定的回答を選択した者には、その力や姿勢が学校生活のどの活動や場面（例：授業、「総学『日本と出会う』」、部活動など）で特に発揮されたか、あるいは身に付いたかを複数回答で聞いた。資料 3（1）は質問項目、（2）は 4・3 の回答数と平均点、（3）は肯定率（4・3 の回答数／全体数）と「総学」の活動の選択率（選択数／4・3 の回答数）を示している。なお（3）では比較として科目群の授業の選択率も記してある。

まず項目別に見ていくと、全体的には 1 年次末と同等か、やや増えている傾向にある。その中で、意見の表明（6：項目、以下同じ）は入学前から 2 年次末まで徐々に伸びており、特に回答 4 の選択者が増えている。社会・世界への興味(7)も、回答 4 の選択者が 2 年次末で最も多い。

逆に 1 年次に比べて減少しているのは、レポート作成(12)と発表(13)である。これはレポートや発表が上手な生徒と自分自身を比べて評価が低くなったとも考えられる。つまり要求度が高くなっているということであり、質が向上したか否かは教員の評価もあわせて検証したい点である。1 年次 2 学期は「キャリアデザイン」の授業で高校初のレポートを完成させた後のアンケートであったため、達成感から評価が高かったのではないか。

次に、「総学」で行った活動（1 学期「日本と出会う」、2 学期「世界と出会う」、校外学習、3 学期「卒業研究」）がどれくらい選択されたかに注目したい。

科目群の授業はどの項目でも 4 ～ 5 割選択されており、生徒にとって最も力が付いたり発揮したりできた教育活動と受け止められている。特にレポートや発表等で論理的にまとめ、発表する力が身に付いたと評価した生徒が多かった。「総学」の活動が科目群の授業とほぼ同じ割合だったのは、以下の項目である。

活動 d 「日本と出会う」：協働(4)
活動 e 「世界と出会う」：社会・世界への興味(7)
活動 f 「校外学習」　　：行動力(2)、協働(4)

「日本と出会う」はグループ活動だったため、選択率が高くなったのであろう。科目群の授業より圧倒的に高かったのは、校外学習の社会・世界への興味(7)である。校外学習は主体性・協働等の項目で総じて高く、ホームステイや学校交流等でのコミュニケーションや班別行動などで実際に異文化を体験させることに大きな成果が見いだせる。また、活動 g「卒業研究」は自発的な調査(8)の項目で、科目群の授業をやや上回った。「総学」での「卒業研究」は「研究とは何か」や先輩の経験談を聞くなど、研究の心構えを知ることが中心であった。3 月 13 日の構想発表会の前にアンケートを実施したため、調査に関する項目全般(7～13)を選択した者が少なかったと思われる。「卒業研究」が本格的に始まる次年度は、これらの項目の選択率が上がるように指導していく必要がある。

上記の結果から、教科と「総学」が相補的な関係になると教育効果がより高まると言える。1 年次の選択率で高かったのは年次の科目「産業社会と人間」の活動や「キャリアデザイン」であり、必修科目の授業を挙げた生徒は多い項目でも 1 割だった。2 年次からの科目群の授業において、各教員は 3 年次の「卒業研究」や卒業後の進路までも見据えてカリキュラムを作成する。それは教員による講義形式に止まらず、生徒主体の学習であることが多い。このような本校の核とも言える科目群の授業の選択率が高いのは当然であり、科目群の授業を補う、あるいは相乗効果が見込める活動を「総学」で展開することが望ましい。1 つには校外学習と関連させ、世界に目を向けさせる活動が挙げられよう。また、科目群を越えた協働学習により、広い視点を獲得させることもできる。「総学」のカリキュラム作成の際、留意したい点である。

【資料 3】

## (1)継続アンケートの質問内容

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 人に言われてでなく、自分で考え、判断することができた。 | 主体性(思考) |
| 2 | 自分で決めたことを行動に移すことができた。 | 主体性(行動) |
| 3 | 一度決めたら最後までやり遂げようと努力した。 | 主体性(態度) |
| 4 | 他の人と協力し、助け合って活動することができた。 | 協働(コミュニケーション) |
| 5 | 他の人の意見や考えを理解し、尊重することができた。 | 協働(コミュニケーション) |
| 6 | 自分の意見や考えを他の人に伝えることができた。 | 協働(コミュニケーション) |
| 7 | 身の回りや社会・世界に興味や疑問を持つことができた。 | 多様性・知的好奇心 |
| 8 | 興味があることについて、本を読んだり自分で調べたりできた。 | 多様性・知的好奇心 |
| 9 | 興味があることについて、いろいろな人に話を聞いたり校外に出かけたりできた。 | 多様性・知的好奇心 |
| 10 | 様々な角度から物事を考え、自分なりに課題(問題点)を見つけることができた。 | 多様性・知的好奇心 |
| 11 | 必要な情報を探し集め、自分なりに分析することができた。 | 論理性 |
| 12 | 伝えたいことをわかりやすく(論理的に)文章にまとめることができた。 | 論理性 |
| 13 | 伝えたいことをわかりやすく(論理的に)発表することができた。 | 論理性 |
| 14 | 家庭学習や課題への取組など、ものごとを計画的に進めることができた。 | 自己形成 |
| 15 | 将来の夢や方向性を考えることができた。 | 自己形成 |

## (2)回答平均

入学前

| 番号 | 回答4 | 回答3 | 平均 |
|---|---|---|---|
| 1 | 18 | 95 | 2.82 |
| 2 | 49 | 81 | 3.11 |
| 3 | 50 | 87 | 3.16 |
| 4 | 49 | 94 | 3.19 |
| 5 | 41 | 103 | 3.14 |
| 6 | 33 | 59 | 2.74 |
| 7 | 49 | 71 | 3.04 |
| 8 | 60 | 58 | 3.09 |
| 9 | 31 | 63 | 2.74 |
| 10 | 22 | 22 | 2.74 |
| 11 | 21 | 76 | 2.71 |
| 12 | 14 | 41 | 2.31 |
| 13 | 13 | 43 | 2.28 |
| 14 | 16 | 56 | 2.41 |
| 15 | 89 | 51 | 3.39 |

1年1学期

| 番号 | 回答4 | 回答3 | 平均 |
|---|---|---|---|
| 1 | 19 | 102 | 2.87 |
| 2 | 23 | 94 | 2.86 |
| 3 | 45 | 84 | 3.08 |
| 4 | 57 | 79 | 3.19 |
| 5 | 32 | 96 | 3.00 |
| 6 | 25 | 72 | 2.75 |
| 7 | 32 | 81 | 2.91 |
| 8 | 37 | 69 | 2.86 |
| 9 | 20 | 39 | 2.39 |
| 10 | 17 | 17 | 2.57 |
| 11 | 25 | 82 | 2.81 |
| 12 | 13 | 62 | 2.51 |
| 13 | 9 | 39 | 2.30 |
| 14 | 8 | 33 | 2.13 |
| 15 | 55 | 77 | 3.17 |

1年2学期

| 番号 | 回答4 | 回答3 | 平均 |
|---|---|---|---|
| 1 | 26 | 92 | 2.88 |
| 2 | 27 | 87 | 2.86 |
| 3 | 56 | 66 | 3.10 |
| 4 | 69 | 61 | 3.24 |
| 5 | 32 | 103 | 3.04 |
| 6 | 32 | 73 | 2.84 |
| 7 | 59 | 65 | 3.13 |
| 8 | 57 | 56 | 3.04 |
| 9 | 30 | 52 | 2.62 |
| 10 | 27 | 79 | 2.81 |
| 11 | 44 | 80 | 3.04 |
| 12 | 23 | 68 | 2.67 |
| 13 | 24 | 53 | 2.58 |
| 14 | 18 | 28 | 2.16 |
| 15 | 74 | 65 | 3.31 |

1年次末

| 番号 | 回答4 | 回答3 | 平均 |
|---|---|---|---|
| 1 | 22 | 90 | 2.83 |
| 2 | 33 | 78 | 2.89 |
| 3 | 51 | 80 | 3.13 |
| 4 | 48 | 82 | 3.11 |
| 5 | 40 | 85 | 3.03 |
| 6 | 27 | 82 | 2.84 |
| 7 | 36 | 73 | 2.89 |
| 8 | 32 | 67 | 2.75 |
| 9 | 16 | 40 | 2.35 |
| 10 | 22 | 22 | 2.76 |
| 11 | 22 | 91 | 2.83 |
| 12 | 16 | 78 | 2.65 |
| 13 | 12 | 75 | 2.58 |
| 14 | 13 | 49 | 2.33 |
| 15 | 72 | 62 | 3.27 |

2年次末

| 番号 | 回答4 | 回答3 | 回答2 | 回答1 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 38 | 71 | 40 | 5 | 2.92 |
| 2 | 36 | 67 | 45 | 5 | 2.88 |
| 3 | 53 | 58 | 37 | 4 | 3.05 |
| 4 | 64 | 60 | 26 | 4 | 3.19 |
| 5 | 50 | 74 | 26 | 4 | 3.10 |
| 6 | 47 | 58 | 45 | 3 | 2.97 |
| 7 | 61 | 55 | 33 | 4 | 3.13 |
| 8 | 46 | 63 | 32 | 8 | 2.99 |
| 9 | 23 | 49 | 65 | 12 | 2.58 |
| 10 | 25 | 71 | 43 | 9 | 2.76 |
| 11 | 34 | 66 | 47 | 3 | 2.87 |
| 12 | 23 | 48 | 65 | 14 | 2.53 |
| 13 | 19 | 43 | 75 | 13 | 2.45 |
| 14 | 19 | 39 | 59 | 32 | 2.30 |
| 15 | 57 | 65 | 22 | 6 | 3.15 |

(実施日と回答数…入学前:H25年4月2日160名、1学期:7月19日159名、2学期:11月29日159名、1年次末:H26年2月28日159名、2年次末:H27年3月6日154名)

## (3)「総合的な学習の時間」の選択率

| | 4・3回答 | 肯定率 | 総学①日本 | 選択率 | 総学②世界 | 選択率 | 校外学習 | 選択率 | 総学③卒研 | 選択率 | 科目群授業 | 選択率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 109 | **70.8%** | 23 | **21.1%** | 19 | **17.4%** | 45 | **41.3%** | 29 | **26.6%** | 63 | **57.8%** |
| 2 | 103 | **66.9%** | 31 | **30.1%** | 23 | **22.3%** | 45 | **43.7%** | 33 | **32.0%** | 45 | **43.7%** |
| 3 | 111 | **72.1%** | 21 | **18.9%** | 16 | **14.4%** | 27 | **24.3%** | 21 | **18.9%** | 55 | **49.5%** |
| 4 | 124 | **80.5%** | 50 | **40.3%** | 29 | **23.4%** | 55 | **44.4%** | 9 | **7.3%** | 56 | **45.2%** |
| 5 | 124 | **80.5%** | 42 | **33.9%** | 34 | **27.4%** | 47 | **37.9%** | 9 | **7.3%** | 48 | **38.7%** |
| 6 | 105 | **68.2%** | 35 | **33.3%** | 29 | **27.6%** | 40 | **38.1%** | 14 | **13.3%** | 48 | **45.7%** |
| 7 | 116 | **75.3%** | 37 | **31.9%** | 43 | **37.1%** | 71 | **61.2%** | 29 | **25.0%** | 44 | **37.9%** |
| 8 | 109 | **70.8%** | 12 | **11.0%** | 18 | **16.5%** | 25 | **22.9%** | 54 | **49.5%** | 52 | **47.7%** |
| 9 | 72 | **46.8%** | 13 | **18.1%** | 8 | **11.1%** | 21 | **29.2%** | 29 | **40.3%** | 32 | **44.4%** |
| 10 | 96 | **62.3%** | 14 | **14.6%** | 10 | **10.4%** | 22 | **22.9%** | 30 | **31.3%** | 44 | **45.8%** |
| 11 | 100 | **64.9%** | 23 | **23.0%** | 27 | **27.0%** | 29 | **29.0%** | 35 | **35.0%** | 44 | **44.0%** |
| 12 | 71 | **46.1%** | 17 | **23.9%** | 19 | **26.8%** | 16 | **22.5%** | 13 | **18.3%** | 39 | **54.9%** |
| 13 | 62 | **40.3%** | 26 | **41.9%** | 17 | **27.4%** | 15 | **24.2%** | 6 | **9.7%** | 32 | **51.6%** |
| 14 | 58 | **37.7%** | 12 | **20.7%** | 8 | **13.8%** | 9 | **15.5%** | 7 | **12.1%** | 29 | **50.0%** |
| 15 | 122 | **79.2%** | 7 | **5.7%** | 12 | **9.8%** | 18 | **14.8%** | 49 | **40.2%** | 58 | **47.5%** |

## 5．おわりに～本年度の取り組みを振り返って～

本校における2年次の「総合的な学習の時間」は、キャリア教育の一環として行っている。すなわち1年次の「産業社会と人間」「キャリアデザイン」から3年次の「卒業研究」への流れの中に位置づけて実施されるものである。

現2年次である20期生は「自ら立ち、生きていく思想的基盤をもつ人間の育成」を主目標とし、キーワードとして「出会い」を掲げた[(3)]。これらの目標やテーマは特に「産業社会と人間」で明確であり、新しく導入したプロジェクト学習で1学期は社会理解、2学期は自己理解、3学期は他者理解をテーマにグループで調査や討論を行った。一方「キャリアデザイン」は、知り・考え・伝える活動を通して、学びのスキル・ソーシャルスキル・マネジメントスキルを身に付けることを目的とする科目であるが、昨年度は「卒業研究」を見据え、調査の基礎を1年間を通して学ばせることとした。

本年度1学期の取り組み「日本と出会う」には、3つの意味があったと考えている。

1つは海外校外学習に行く前に自分の国を知ることである。最近テレビなどで、日本を知らない・外国人に日本のことを聞かれて答えられない日本人、また日本人以上に日本を知っている・日本に興味がある外国人が多いことが目につく。自分の住んでいる地域や国は身近で当たり前すぎるから知らず、気づかないのかも知れないが、それで良いのだろうか。「グローバル」と言う前に、まず自分のいるところをよく知ることは、自らと異なる国や文化と比較する上で必要なことであり、それらの人々とコミュニケーションをとる上でもとても重要なことであると考える。2つ目は自分の五感で確かめることである。情報過多な時代ではあるが、webなどでは自分の知りたい情報がピンポイントで手に入るだけで、文化・風土・気候など様々な要因が関連づけられていないことが多くある。なぜそこにあるのか、なぜそこに起こったのかなど、全てがつながっているということを自分たちの感覚で学び取ってほしかった。3つ目は、自分たちで計画・実行するという体験である。これは、計画の大事さを知るとともに予測外の事態への対処の仕方等を経験し、今後の生活のあり方を考え、生きていく術を学ばせるためである。

実際には“日帰り”という制約が付いて川越から約100km前後という活動地域となってしまったが、生徒は目的を良く考えて計画を立て、その地域の人々にインタビューするなど自分たちが選んだ地域を存分に体験してきたと思う。

次に2学期の「世界と出会う」は、単なる異文化体験で終わらないよう、また2年次の3学期から始まる「卒業研究」を意識して、プレ研究の要素も取り入れた。日本と訪問する国・地域を比較するテーマを各生徒が考え、日本で事前に調査し、現地でフィールドワークを行う。インドネシアや台湾は交流会の準備等であまり時間は取れなかったようであるが、事前学習で質問や調査内容を考え、現地では自由時間等で調査を進めていた。なお、校外学習の全般的な準備や人数の制約、他の様々な行事等で教員の事前・事後指導が十分であったとは言い切れない。よりよい方法については課題が残る。

20期生は、手帳（能率手帳スコラ）を昨年に引き続き持たせている。これには2つの意味があると考える。1つは学習の習慣化である。ベネッセの調査によると学力の差と学習時間には関連が見られるとのことである。確かな基礎学力をつけさせるために、記録を取って振り返ったり計画を立てたりすることは必要であろう。2つ目は毎週目標を立て、また振り返ることで、日々の行動を意義あるものにすることである。1年や1学期という長いスパンでなく、各月・各週というスモールステップの中で目標を持って生活するのに有効である。特に次年度は、選択科目の課題に加えて、「卒業研究」のレポートや発表資料の提出締切、進路に関する書類の準備などマネジメントスキルが大いに問われる。1年次と比べ、手帳を記入し提出する率が落ちている現状であるが、3年次生になる前に指導していきたい。

3カ所の校外学習が全て終わり、「世界と出会う」報告会の次は、いよいよ「卒業研究」である。1年次の「産業社会と人間」や「キャリアデザイン」、また2年次に体験した日本各地や世界との「出会い」

から学び考えたことを、今度は自らが設定する研究テーマに対する好奇心や発見、感動にぜひつなげてほしいと考えている。

【注】

(1)平野延行ほか（2013）「平成25年度『総合的な学習の時間』実践報告」『筑波大学附属坂戸高等学校 研究紀要』第51集 p.33

(2) 今野良祐ほか(2013)「海外校外学習(修学旅行)の 3 か所への分散実施の取り組み」『同』第 51 集 pp.63～64

(3)昨年度の取り組みの詳細については、北原立朗ほか（2013）「平成25年度『産業社会と人間』実践報告」『同』第51集 pp.1～12、塗田佳枝ほか（2013）「平成25年度『キャリアデザイン』実践報告」『同』第51集 pp.13～23を参考のこと。